

## 《語句の意味》

・・・はや積み果てつ。」「つ”は完了の助動詞

「はやくも、積み込んでしまった。」

中等室

「船室の等級で、上等室の次のクラス。」

いたづらなり。

「むなく、役に立たないことである。」

カルタ仲間 「カルタはここではトランプのこと。」

「トランプをする仲間」

余一人のみなれば。

「私一人だけなので。」 「このころは、倒置法。

洋行の官命をかうむり

「ヨーロッパに行く、官庁の命令を受けて」

新たならぬはなく 「ぬ”は打ち消しの助動詞

「目新しくないものはなく」

書き記しつる 「つる”は完了の助動詞

「書き記した」

幾千言をかなしけん。」「か”は疑問の係助詞、”けん”は過

去推量の助動詞

「幾千語になったろうか。」

もてはやされしかど、 「しか”は過去の助動詞

「もてはやされたけれど」

身の程知らぬ放言 「ぬ”は打ち消しの助動詞

「自分の能力、立場などをわきまえない無責任な発言」

さらぬも 「ぬ”は打ち消しの助動詞

「そつでなくても」

世の常の動植金石

「ありふれた、珍しくもない動物、植物、金属、鉱石」

いかに見けん。」「か”は疑問の係助詞、”けん”は過

去推量の助動詞

「どのように見たらどうか。」

途に上りし時 「し”は過去の助動詞

「旅に出発した時」

養ひ得たりけん、 「けん”は過去推量の助動詞

「そのような（気風を）獲得したのでらうか」

あらず、 「ず”は打ち消しの助動詞

「そつではない、」

故あり。

「理由がある。」

げに

「現に、実際に」

昨日の是は

「昨日よじとしたことは」

今日の非なる

「今日はだめである」

たれに見せん。

「か”は疑問の係助詞、”ん”は意志の助動詞

「誰にみせようか。」

縁故

「理由」

経ぬ。

「ぬ”は完了の助動詞

「経た。（たった。）

旅の憂さ

「旅のつまらなさ」 船の旅なので退屈なのである。

習ひ

「習慣」 初対面の人でも話をすれば気が紛れる。

世をいとひ

「世間の人々との交渉をわずらわしがり」

心地すがすがしくもなりな。」「な”は完了の助動詞、”ん”

は推量の助動詞、未来の推量を表す。「

さはあらじ。」「じ”は打消推量の助動詞

「そのようにはならないだろう」

程もあるべけれは、いで。」「べけれ”は当然の助動詞

「時間もあらずなので、さあ、・・・」

## 《質問》

、主人公はいまどこにいるのか。

、主人公はどこへ行くつもりとしているのか。

、主人公はこれから、何を語ろうとしているのか。

、この小説の年代は明治二十年ころのことである。そのころの

日本の状況はどのようなものであったか。

## 《メモ》

## 《語句の意味》

厳しき庭の教へを受けし甲斐に、 「し」は過去の助動詞

「厳しい家庭教育を受けた結果で」

学問の荒み衰ふることなく、

「学問が荒れてだめになってしまつこともなく」 父親が亡くなつたからといって、ぐれてしまつて勉強しなくなるといったこともないということ。

一級の初めに記されたりし 「し」は過去の助動詞

「一組の最初に書かれていた」 成績順に一組の一番から名前を書くのである。現在のS予備校と同じ。

母の心は慰みけらし 「けらし」は「けるらし」の縮まった

もの。「ける」は過去の助動詞、「らし」は推定の助動詞

「母の気持ちは慰められたにちがいない」

某省に出仕して

「なんとか省に勤めに出て」 省庁名はぼかしているが、中央の官庁に勤めた。もちろん、幹部候補として。

官長の覚えことなりしかば、 「しか」は過去の助動詞

「役所の長官の信用が格別であつたので」

勇み立ちて

「(どんな困難にもくじけず)がんばるつという気持ちが、身体中にみなぎつて」

ベルリンの都に來ぬ 「ぬ」は完了の助動詞

「ベルリンの都に來た。」

模糊たる功名の念

「ぼんやりした立身出世の思い」

何らの光彩ぞ、我が目を射んとするは。 「ん」は意志の助動詞

詞

「私の目を射ようとするのは、どのようにあざやかに輝く光なのか。」 (倒置法)

幽静なる境なるべく思わるれど 「べく」は婉曲の助動詞

「ひっそりと静かな場所であるように思われるけれど」

人道

「歩道」

雲にそびゆる楼閣

「空高くそびえ立つ高い建物」

夕立の音

「ザアザア」という夕立の時の雨の音のこと。 比喩。

噴井

「噴水」

半天

「天の半分、中空」

応接にいとまなき

「応接にひまがない」

うべなり。

「もつともである。」

心をば動かさじ

「心を動かすまい」

おほやけの紹介状

「政府(官庁)の紹介状」

伝へもせん

「伝えよう」

問はぬことなかりき。

「ぬ」は打ち消しの助動詞、「き」は過去の助動詞

「尋ねないことはなかった。」

所の大学

「ベルリン大学」

さらぬを

「そうでないものを」

幾巻をかなしけん

「か」は疑問の係助詞、「けん」は過去推量の助動詞

「幾巻になつたらうか。」

思ひ計りしがごとく 「し」は過去の助動詞、「ごとく」は比況の助動詞

「思い考えたような」

政治家になるべき特科のあるべうもあらず 「べき」は可能の助動詞、「べう」は当然の助動詞、「ず」は打ち消しの助動詞

「政治家になることのできるような特別の学科はあるはずもない」

く

「政治家になることのできるような特別の学科はあるはずもない」

たちが

「し」は過去の助動詞

「たつたが」

「らん」は現在推量の助動詞

好尚なるらん

「に」は断定の助動詞、「や」は疑問

の係助詞(結び省略)

「当たつたからであるつか」

「や」は疑問の係助詞、「けん」は過去推量の助動詞

「しようとしたのであつたらうか」

堪ふべけれど、忍ぶべからず 「べけれど、べからず」は可能の助動詞

「堪えられるが、我慢できない」

「かかづらぶべきにあらぬを論じて」 「べき」は当然の助動詞、「ぬ」は打ち消しの助動詞

「こたわるべきでない」と論じて

「かかづらぶべきにあらぬを論じて」 「べき」は当然の助動詞、「ぬ」は打ち消しの助動詞

「こたわるべきでない」と論じて

破竹のごとくなるべし 「」ごたく」は比況の助動詞、”べし”

は推量の助動詞

「竹を割るように(たやすく)なるだろう」

広言しつ。「」つ」は完了の助動詞

「大きなことを言ってしまった。」

いかでか喜ぶべき。「」か」は反語の係助詞、”べき”は推量の

助動詞

「どうして喜ぶだろうか、喜ぶはすがない。」

足らざりけんを 「」ざり」は打ち消しの助動詞、”けん”は

過去推量の助動詞

「足らなかったのだろうか」

その故なくてやは。「」やは」は反語を表す。「

「その理由がないのであるうか。いやあったのだ。」

かたくななる心

「頑固な心」 勉強のための固い決意と受け取っている。

帰して

「(考えが)結局そこに落ち着いて

かつはあざけり、

「一方では、あざけり」

ねたみたりけん。「」たり」は完了の助動詞、”けん”は過去

推量の助動詞

「ねたんだのであるうか。」

ねれど、

「そつだけれど」

故よし

「わけ、いわれ」

我が身だに知らざりしを、いかでか人に知らるべき。「」だに”

は限定を表す副助詞、”ざり”は打ち消しの助動詞、”し”

は過去の助動詞、”る”は受身の助動詞、”べき”は推量の

助動詞。「

「自分自身でさえよくわからなかったのを、どうして人がわ

かるだろうか。」

よくしたるにあらざ、 「」たる”は完了の助動詞、”ず”は打

ち消しの助動詞

「よくできたのではない。」

ただ一筋にたどりしのみ。「」し”は過去の助動詞、”のみ”は

限定を表す副助詞

「ただひとすじにたどっただけだ。」

乱れざりし 「」ざり”は打ち消しの助動詞、”し”は過去

の助動詞

「乱れなかった」

勇氣ありしにあらざ、 「」し”は過去の助動詞、”ず”は打

ち消しの助動詞

「勇氣があつたのではない」

手足を縛せしのみ。「」し”は過去の助動詞、”のみ”は

限定を表す副助詞

「手足を縛っただけだ。」

信じたりき。「」たり”は完了の助動詞、”き”は過

去の助動詞

「信じてしまっていた。」

思ひし 「」し”は過去の助動詞

「思っていた」

ぬらしつる 「」つる”は完了の助動詞

「ぬらしてしまった」

思ひしが、これぞなかなか我が本性なりける。「」し”は過

去の助動詞、”ける”は詠嘆の助動詞

「思ったが、これがかえって私の本性であったのだ。」

生まれながらにやありけん、 「」に”は格助詞、”や”は疑問の

係助詞、”けん”は過去推量の助動詞

「生まれつきあつたのだろうか。」

育てられしによりてや生じけん。「」られ”は受身の助動詞、

”し”は過去の助動詞、”けん”は過去推量の助動

詞。

「育てられたのによつて生じたのだろうか。」

さることなり。「」なり”は断定の助動詞

「それ相応のことである。」

愚かならずや。「」ず”は打ち消しの助動詞、”や”は反語

の係助詞(ありけむ)省略

「愚かでないか、いや愚かだ。」

客を引く女

「客引きをする女」 売春婦のこと。

これに就かん勇氣なく、 「」ん”は意志の助動詞

「この女についていこうとする勇氣がなく」

交はらんやつもなし。「」ん”は意志の助動詞

「交際する方法もない。」

余をねたまむのみならで、

「私をねたまむだけではなくて」

猜疑することとなりぬ。「」ぬ”は完了の助動詞

「ねたんだり疑ったりすることとなった。」

暫時

「しばしの間」

媒なりける。「」ける”は詠嘆の助動詞

「なかだちとなったのであった。」

## 《語句の意味》

漫歩

「当てもなく、気楽に気に入った所を歩き回ること。」

帰らんと 「ん」は意志の助動詞

「帰ろうと」

灯火の海

「明かりの海」 繁華街のこと。

楼上

「高い建物の上」

木欄

「木製の手すり」

襦袢

「下着」 厳密に言えば着物の襦袢ではないが、日本人には通じないのでこゝ表現した。

心の恍惚となりて

「心がぼーっとしてしまつて」

しばしたたずみしこと幾たびなるを知らず。 「し」は過去

の助動詞、”ず”は打ち消しの助動詞

「しばらくの間、たたずんでいたことが何度あつたかわからな

い。」

過ぎんと 「ん」は意志の助動詞

「通りすぎよう」と

声をのみつつ泣く

「声をたてないようにながら泣く」

一六、十七なるべし。 「なる」は断定の助動詞、”べし”

は推量の助動詞

「十六、一七であるに違いない。」

かぶりし 「し」は過去の助動詞

「かぶっていた」

汚れたりとも見えず。 「たり」は存続の助動詞、”ず”は打

ち消しの助動詞

「汚れているとも見えない」

これを写すべくもあらず。 「べし」は可能の助動詞、”ず”

は打ち消しの助動詞

「これを写すこともできない。」

一顧したるのみにて 「たる」は完了の助動詞、”のみ”

は限定の意味の副助詞

「ちよつと見ただけで」

料らぬ 「ぬ」は打ち消しの助動詞

「予測できなこ(ほどの)」「

ここに立ちて泣くにや。

「に」は断定の助動詞、”や”は疑

問の意味の係助詞

「ここに立つて泣いているのである。」

覚えす 「ず”は打ち消しの助動詞

「思わず」

所に係累なき外人

「この土地にわずらわしいつながりのない外国人」

こともあらん。 「ん”は推量の助動詞

「こともあろう。」

うちまもりしが 「し”は過去の助動詞

「じつと見つめていたが」

真率なる心や色に現れたりけん。

「や”は疑問の助詞、”

たり”は完了の助動詞、”けん”は過去推量の助動詞」

「正直でまじめな気持ちが顔色に表れたのだらうか。」

彼のこゝとく酷くはあらじ。 「こゝとく”は比況の助動詞、”じ”

は打ち消し推量の助動詞

「彼のように酷くはないだらう。」

しばし洩れたる 「たる”は完了の助動詞

「しばらく洩れていた」

恥なき人とならんを。 「ん”は推量の助動詞

「恥も知らない人間になつてしまつのを」

後で出てくるが、座頭の妾になれということ。

従はねばとて 「ね”は打ち消しの助動詞

「従わないと言って」

葬らではかなはぬに 「ぬ”は打ち消しの助動詞

「葬儀をしなくてはならないのに」

貯へだになし。 「だに”は限定の意味の助動詞

「蓄えたお金さえない。」

項

「首すじ」

声な人に聞かせたまひぞ。 「な”は副詞、”そ”は終助詞、

ともに柔らかな禁止を表す」

「声を人に聞かれないようにしてほしい。」

往来

「道路」

## 《語句の意味》

人を見るがいとほしさに、

「人を見るのがいやで」

入れば

「入ると」 仮定ではない。

梯

「階段」

くぐるべきほどの戸あり。 「く」は可能の助動詞

「くぐれるくらい」の戸がある。

咳枯れたる女傭の声して 「たる」は存続の助動詞

「声がかれているおばあさんの声が出て」

戸を激しくたてきりつ。 「つ」は完了の助動詞

「戸を激しく閉めきってしまった」

しばし茫然として立ちたりしが 「たり」は存続の助動詞、

「し」は過去の助動詞

「しばらくほつぜんとして立っていたが」

名なるべし。 「なる」は断定の助動詞

「べし」は推量の助動詞

「名前であらう。」

慇懃に

「ていねいに」

振る舞いひせしを詫びて、 「し」は過去の助動詞

「振る舞いをしたのをわびて」

麻布

「麻で織った布」カーテンに使っている。

臥床

「ベッド」

亡き人なるべし。 「なる」は断定の助動詞、

「べし」は推量の助動詞

「亡くなった人なのである。」

立たば頭のつかふべき所に臥床あり。 「べし」は婉曲の助動詞

「立つと頭のつかえるようなところにベッドがある。」

陶瓶にはここに似合わしからぬ価高き花束を生けたり。

「ぬ」は打ち消しの助動詞、「たり」

は存続の助動詞

「花瓶にはここには似合わない値段の高い花束がさしてあ

る。」

お金を困っている家になぜこの値段の高い花束があるの

かが問題である。

微紅を潮したり。 「たり」は存続の助動詞

「（類は）かすかに紅みをさしている。」

室をいでし後にて、 「し」は過去の助動詞

「部屋を出た後で」

よき人なるべし。

「なる」は断定の助動詞、

「良い人に違いない。」

我をばよも憎みたまはじ。

「じ」は推量の助動詞

「私をまさか憎むことはなならないでしょう。」

彼が抱へとなりしより、

「彼の雇い人となつてから」 『抱え』という言葉を使った

あたり、豊太郎の意識（日本の芸者のような感覚）がうかがえる。

助けんと思ひしに 「ん」は推量の助動詞、「し」は過

去の助動詞

「助けてくれるだろうと思つたが」

身勝手なる言ひ掛けせんとは。 「ん」は意志の助動詞

「身勝手な言いがかりをつけようとは（思わなかった。）」

よしや

「たとえ」

それもならずば母の言葉に。 「（）従ふほかなし（）が省略されている。」

「それもできないならば母の言葉に（従つ以外ない。）」

知りてするにや。 「に」は断定の助動詞、「や」は疑

問の係助詞

「知つてするのであるうか、」

隠し

「ポケット」

それにて足るべくもあらねば、 「べく」は当然の助動詞、

「ね」は打ち消しの助動詞

「それでは足りるはずもないので」

価をとらすべきに。 「べき」は意志の助動詞

「お金を渡すつもりだ」

そそぎつ 「つ」は完了の助動詞

「そそいだ」

謝せんとして 「ん」は意志の助動詞

「お礼をしようとして」

咲かせてけり。 「て」は完了の助動詞、「けり」は詠嘆の

助動詞

「咲かせたのであった。」

やうやくしげくなりもてゆきて、

「だんだん頻繁になつていつて」

同郷人

「故郷の同じ人」 ここでは日本人のこと。

色を舞姫の群れに漁するものしたり。 「たり」は完了の

助動詞

「手当たり次第に踊り子と遊んでいるものと考えた。」

はばかりあれど、

「遠慮があるが」

## 《語句の意味》

報じつ。

「じ」は完了の助動詞

「伝えた」

さらぬだに、

「ぬ」は打ち消しの助動詞、「だに」は限

定の意味の副助詞

「そうでなくてさえ」

余がすこぶる学問の歧路に走るを知りて、

「私がはなはだしく学問のわき道にそれているのを知って」

本筋 法律・政治 わき道 歴史・文学

旨

「（伝えるように）言われたことの主な点」

我が官を免じ、我が職を解いたり。

「たり」は完了の助動詞

「役人をクビにして、仕事（留学生）の地位も剥奪した。」

官は事務官、あるいは秘書官といった役人としての地位、

職は課長とか部長とかの職を言う。

即時に郷に帰らば、

「帰ら」は未然形に「ば」で仮定を表す。

「すぐに故郷（日本）に帰るならば」

給すべけれど、

「べけれ」は可能の助動詞

「支給することができが」

おほやけの助けをば仰ぐべからず

「べけれ」は可能の助動詞

詞

「国（役所）の援助を仰ぐことはできない」

猶予を請ひて、

「猶予をお願いして」

とやかう 「とやかへ」の音便

「あれやこれやと」

書なりき。

「き」は過去の助動詞

「手紙であった」

よそ目に見るより清白なりき。

「き」は過去の助動詞

「はた目で見るとより清純だった。」

恥づかしき業

「恥づかしい仕事」

当時踊り子、芸人などは一段低く見ら

れていた。

当世の奴隷

「今の世の中の奴隷」

あまりに過酷な条件で使われていたた

めこのように言った。

言ひつゝ

「し」は過去の助動詞、

「言ひつゝ」

「つゝ」は比況の助動詞

はかなきは

「短い命（踊り子としての生命のこと）で哀れなのは」

芝居の化粧部屋に入りてこそ紅粉をも装ひ

「劇場の化粧部屋に入ってこそ、紅・おしろい（メイク用の白

粉、紅）をも装い」 仕事では化粧するが、ふだんの生活で

はとんでもない、ということ。

親はらから

「親兄弟」

その辛苦いかにぞや

「や」は疑問の意味の係助詞、（ありけ

ん）などの語が省略されている。」

「その苦勞はどんなものであるうか。」

卑しき限りなる業

「この上なく卑しい仕事」

売春婦などを指す。

まれなりとぞいふなる。

「まれであると言われている。」

剛気ある

「（他からの圧力に屈せず）どこまでも自分を守ること。」

さすがに好みしかど

「しか」は過去の助動詞

「さすがに好んだけれど」

言葉の訛りをも正し

「言葉の訛りを直し、」

誤り字少なくなりぬ

「ぬ」は完了の助動詞

「誤字が少なくなった。」

師弟の交はり

「師匠と弟子の関係」

色を失ひつ

「顔色を失った。」

余は彼が身にかかはりしを包み隠しぬれど

「し」は過去の助動詞

「私は彼女の身に関係があったことを包み隠したけれど、」

エリスのことが免官の理由の一つになっている。

余を疎んぜんを恐れてなり。

「ん」は意志の助動詞

「私を嫌って遠ざけようとするのを恐れてである。」

要なけれど

「必要がないけれど」

つひに離れ難き仲となりしはこの折なりき。

「し」は過去の助動詞

助動詞、「き」は過去の助動詞

「とうとう離れ難い仲となったのは、この時であった。」

また諍る人もあるべけれど

「べけれ」は推量の助動詞

「また非難する人もあるに違いないけれど」

相見し時より

「知り合ったときから」

鬢の毛の解けて掛かりたる

「たる」は存続の助動詞

「頭の両側の毛が解けて掛かっている。」

常ならずなりたる

「ず」は打ち消しの助動詞、  
「たる」は完了の助動詞

「いつもの状態ではなくなってしまうていた」

いかにせん。

「ん」は意志の助動詞

「どのようによつが。」

学成らずして汚名を負ひたる身の浮かぶ瀬あらじ。

「ず」は打ち消しの助動詞、

「たる」は完了の助動詞、

「じ」は打ち消しの助動詞

「学問は成就しないで汚名を負った私の身の浮かぶ瀬はないである。」

出世する道は閉ざされているという事。

「報道せしむることなし。」

「報道させることとした。」

「ぬ」は打ち消しの助動詞

「足りないくらいだけれど」

「たら」は完了の助動詞、

「変えるならば」

「べし」は推量の助動詞

「成り立つである。」

とかう

「とやかへ」

「なり」は断定の助動詞、  
「き」は過去の助動詞

「エリスであった。」

「けん」は過去推量の助動詞

「どのように母を説得したのだらう。」

寄寓する

「家の一部を借りて仮住まいをする。」

「ぬ」は完了の助動詞

「楽しい月日を送った。」

果つれば

「終わると」

「たる」は存続の助動詞

「決まっている仕事のない若い人。」

「たる」は存続の助動詞

「挟んであるのを」

「か」は疑問の意味の係助詞、  
「けん」は過去推量の助動詞

「どのように見たであろうか。」

「よぎりて」

「立ち寄って」

「え」は補助助動詞（・・・できる）、  
「えつべき少女を」

詞

「することができるような少女を」

「し」は過去の助動詞、  
「なる」は断定の助動詞、

「べし」は推量の助動詞

「あったことである。」

「り」は完了の助動詞

「書いた。」

法令条目の枯れ葉

「法令の一条一条の情のない無味乾燥な文章。」

活発々たる

「生き生きとして活発な」

思ひを構へ

「構想を練って」

「し」は過去の助動詞

「作った。」

進退いかなること

「進退がどうなるかなどのこと。」

つまびらかなる

「詳しい」

「き」は過去の助動詞

「した。」

旧業を訪ぬることも難しく

「昔の仕事（法律のこと）を勉強することも難しく」

「だに」は限定の意味の副助詞、

「き」は過去の助動詞

「講義さえ行つて聴くことはまれになった。」

そをいかにといふに

「それをどうしてかと言つと」

「たる」は存続の助動詞

「広まっている」

ドイツに若くはなからん

「ドイツに匹敵する（ドイツを越える）ものはないである」

う。」

すこぶる高尚なるも多きを

「大変高度なものが多いのを」

「ぬ」(前)は打ち消しの助動詞、

「ぬ」(後)は完了の助動詞

「夢にも知らない境地に至つた」

「だに」は新聞の社説をだによくはえ読まぬがあるに。

「ぬ」は打ち消しの助動詞、  
「え」は副詞で

「ぬ」の間にある言葉が不可能である事を表す。

「す。」

「新聞の社説をさえよくは読めないものがあるのに」

飢ゑ凍えし雀の落ちて死にたるも哀れなり。〔「し」は過去の

助動詞、”たる”は完了の助動詞、”なり”は断定の助動詞〕

「飢ゑ凍えた雀が落ちて死んでいるのも哀れである。」

衣の綿をつがつ

「着物の綿を突き通して」

舞台上で卒倒して。〔「つ」は完了の助動詞〕

「舞台上で倒れたと言って」

帰り来しが。〔「し」は過去の助動詞〕

「帰ってきたが」

心地あじう

「気分が悪いと言って」

悪阻といふものなり。〔「なり」は断定の助動詞、

”ん”は推量の助動詞〕

「悪阻といふものなり。」

初めて心づきは母なり。〔「し」は過去の助動詞、”な

”り”は断定の助動詞、”き”は過去の助動詞〕

「初めて気づいたのは母であった。」

さらぬだにおほつかなきは。〔「だに」は限定の意味の助

詞〕

「そうでなくてさえはつきりしないのは

我が身の行く末なる」

「私自身の将来のことであるのに」

もし誠なりせば、いかにせまじ。〔「せ”は過去の助動詞〕

「もし本当であるならば、どうしようか。」

床に伏すほどにはあらねど。〔「ね”は打ち消しの助動詞〕

「ベットに寝るほどではないけれど。」

鉄炉のほとり

「ストーブのそばに」

庖厨にありしエリスが母は。〔「し”は過去の助動詞〕

「台所にいたエリスの母は」

いぶかりつつも

「不審に思いつつも」

由なかりしが。〔「し”は過去の助動詞〕

「方法がなかったのに」

着せられし天方大臣に付きて我も来たり。〔「し”は過去の

助動詞〕

伯のなんぢを見まほしとのたまふ。〔「まほし”は

希望の助動詞〕

「お着きになられた天方大臣に付いて私も来た。」

伯が君に会いたいとおっしゃる。〔「まほし”は

希望の助動詞〕

「故郷からの手紙でしようか。」

悪しき便りにてはよも。〔「あらじ」省略〕

「まさか（悪い頼りではないでしようね。）」

思ひしならん。〔「し”は過去の助動詞、

”ならん”は断定の助動詞、”ん”は推量の助動詞〕

「思ったのである。」

心にな掛けそ。

「気にかけないでほしい。」

今よりこそ。〔「いかめ」省略〕

「今から行く。」

かくは心を用ゐし。〔「じ”は打消推量の助動詞〕

「このようには心遣いをしないだろう。」

大臣にまみえもやせんと思へばならん。〔「なり”は断定の

助動詞、”ん”は推量の助動詞〕

大臣に面会もするのかと思つたのである。」

手づから結びつ。〔「つ”は完了の助動詞〕

「自分の手で結んだ。」

たれもえ言はじ。〔「え”は副詞、”じ”は打消推量の助動

詞〕

「誰も言えないだろう。」

何故にかく不興なる面持ちを見せたまふか。

「どうしてこのように不愉快な顔つきをなさるのか。」

もろともに行かまほしきを。〔「まほし”は希望の助動詞〕

「一緒に行きたいものを。」

よしや富貴になりたまふ日はありとも、我をば見捨てたまはじ。

〔「じ”は打消推量の助動詞〕

「たとえお金持ちにおなりになる日があつても、私を見捨て

ないでしよう。」

我が病は母のたまふごとくならずとも。〔「ごとくなり

は比況の助動詞、”ず”は打ち消しの助動詞〕

「私の病気は母のおっしゃるようではないとしても。」

幾年をか経ぬるを。

「幾年もたったのを。」

友にこそ会ひには行け。

「友人に会いに行くのだ。」

輪下にきしる雪道

「車輪の下がきしる雪道」

相沢が室の番号を問ひて

「相沢の部屋の番号を聞いて

同じく大学にありし日に。〔「し”は過去の助動詞〕

「一緒に大学にいた時に」

余が品行の方正なるを激賞したる相沢が。〔「たる”は完了の

助動詞〕

「私が品行方正なるを大変ほめてくれた相沢が」

故郷よりの文なりや

いかなる面持ちして出迎ふらん」 「らん」は現在推量の助動詞

「どのような顔つきで出迎えるのだらう。」

さまで意に介せざりきと見ゆ。 「ざり」は打ち消しの助動詞、

”き”は過去の助動詞

「それほどまで気にかけていないと見える。」

別後の情を細叙するにもいとまあらず。 「ず」は打ち消しの助動詞

助動詞

引かれて

「連れて行かれて」

閱歴

「経歴」

かへりて他の凡庸なる諸生輩をののしりき。

「き」は過去の助動詞

去の助動詞

「かえって他の平凡な人たちをののしった。」

色を正していさむるやう

「まじめな顔になって、注意する」

今さらに言はんもかひなし

「今さら言っても仕方がない。」

いつまでか一少女の情にかかづらひて、目的なき生活をなすへき

「か」は疑問の係助詞、 ”へき”は義務の助動詞

「いったいいつまで、一少女の情にこだわって目的のない生活をしなければならぬのか。」

人材を知りての恋にあらず。 「ず」は打ち消しの助動詞

「(太田豊太郎という人間の)才能を知っての恋ではない。」

「」

我が弱き心には思ひ定めん由なかりしが

「し」は過去の助動詞

動詞

「私の弱い心には、思い決める方法がなかったので、

しばらく友の言葉に従ひて

「友の友の言葉に従った」

友に対して否とはえ答へぬが常なり。 「ぬ」は打ち消しの助動詞

助動詞

「友達に対しては否(ノー)とは答えられないのがぶつ

つである。」

ホテルの食堂をいでしなれば 「し」は過去の助動詞

「ホテルの食堂を出てきたので」

膚粟立つとも 「」

「肌で鳥肌が立ってくる」とも 「」

なし果てつ。 「」

「し」は完了の助動詞

「こつこつと」

用事のみなりしが 「のみ」は限定の意味の副助詞

「なり」は断定の助動詞、 ”し”は過去の助動詞

出発すべし 「べし」は意志の助動詞

「出発するつもりだ。」

従ひて来べきか。 「べき」は可能的助動詞

「付き従って来られるか。」

いかで命に従はざらん 「ざらん」は打ち消しの助動詞、

”ん”は意志の助動詞

「どうして命令に従わないことがありますか。」

卒然

「突然」

よくも測らず 「ず」は打ち消しの助動詞

「よくも考えないで」

ただちにづべなう。

「ただちに承知したと返事をする」

賜りしを 「し」は過去の助動詞

「もらったのを」

支えつべし。 「つ」は強意の助動詞、 ”べし”は推量の助動詞

は推量の助動詞

「支えられるだらう」

幾月か心づかでありけん。 「けん」は過去推量の助動詞

「何ヶ月か気づかなかったのだらう」

言ひおこせつ。 「つ」は完了の助動詞

「言っておこした。」

故あればなるべし。 「べし」は推量の助動詞

「理由があるからなのであらう。」

いでゆく後に残らんももの憂かるべく 「べく」は推量の助動詞

動詞

「出てゆく後に残っているのもつらいだらう」

涙こぼしなどしたらんには後ろめたかるべければとて、

「べけれ」は推量の助動詞

「涙をこぼしたりなどしたときは、後ろ髪を引かれるだらうと思つて」

「」

知る人がり

「知っている人の名前」

何事をか叙すべき 「べき」は意志の助動詞

「何事をのべようか」

拉し去りて

「連れ去って」

圍繞せしは 「し」は過去の助動詞

「取り囲んだのは」

驕奢

「ぜいたく」

彫鏤巧みを尽くしたる 「たる」は完了の助動詞

實主の間に周旋して事を弁ずる者も

「客と主人の間を行ったり来たりして通訳をしたのも」

日ごとに文を寄せしかば、え忘れざりき。

「日ごとに手紙をよこしたので、忘れることができなかつた。」

「

「し」は過去の助動詞

「出発した」

向かはんことの心憂々に

「向かうようなことじつに」

寝ねつ 「つ」は完了の助動詞

「寝た。」

夢にはあらずやと思ひぬ。 「ず」は打ち消しの助動詞、

「や」は疑問の係助詞、 「ぬ」は完了の助動詞

「夢ではないかと思った。」

かかる思ひをば、…今日の日の食なかりし折にもせざりき。

「し」は過去の助動詞、 「ざり」は打ち消しの助動詞、

「き」は過去の助動詞

「このような思ひは、…今日食べるものがなかつた」  
きにもしなかつた。」

君を思ふ心の深き底をば今ぞ知りぬる。 「ぬる」は完了の助

動詞

「あなたを思う心が大変深いのを今こそ知ったのです。」

とどまりたまはぬことやある。 「ぬ」は打ち消しの助

動詞

「とどまりなさらないことはあるつか。」

つなぎとめではやまし。 「じ」は打消意志の助動詞

「つなぎ止めておかないではない。」

いづくよりか得ん。 「か」は疑問の意味の係助詞、

「ん」は推量の助動詞

「どこから得られるだろうか。」

君が世にいでたまはん日を待ためと常には思ひしが 「し」

は過去の助動詞

「あなたが出世する日を待とうといつも思っていたが」

ただ一瞬の苦難なりと思ひしは迷ひなりけり。 「し」は過去

の助動詞、 「なり」は断定の助動詞、 「けり」は

詠嘆の助動詞

「ただ短い期間の苦しいことと思っていたが、間違いであつた。」

我が身の常ならぬがやうやくにしるくなれる。 「ぬ」は打

消の助動詞、 「る」は完了の助動詞 「

「私の身の普通でない（妊娠している）のがようやく自立つてきた。」

我をばゆめな捨てたまひそ 「な」は副詞、 「そ」は終助詞

「柔らかない禁止を表す。」

「私をけつして捨てないでください。」

過ぎしころには似て思ひ定めたるを見て心折れぬ 「たる」

は完了の助動詞、 「ぬ」は完了の助動詞

「過ぎ去つたころ（以前）とは違って（私が）決心したの

を見て（母の）気持ちが折れた。」

身を寄せんとぞ言ふなる。 「なる」は断定の助動詞

「身を寄せようと言っている。」

我が地位を明視し得たり。 「たり」は完了の助動詞

「自分の地位をはつきりと見ることができた。」

頼みし胸中の鏡は曇りたり。 「たり」は完了の助動詞

「頼りとしていた胸の中の鏡（明解な判断力）曇ってい

た。」

大臣はすでに我に厚し

「大臣はすでに私を厚遇してくれている。」

これに未来の望みをつなくことには、神も知るらん、絶えて思ひ至らざりき。 「なり」は打ち消しの助動詞、

「き」は過去の助動詞

「これに未来の出世の望みをつなくことには、誓って、私はまったく思い至らなかつた。」

は反語の助詞

「やはり、冷然としていたか、（いや）いられなかつた。」

本国に帰りて後もともにかくてあらば云々

「本国に帰つた後も一緒にこのようであればうんぬん」

相沢は帰国した後も豊太郎といつしよに働きたいと思つている。

もちろん天方大臣のもとでだが。

公事なれば明らかには告げざりしか。 「し」は過去の助動詞

「公的なことなのではっきりとは告げなかつたのか。」

早く大臣に告げやしけん。 「や」は疑問の意味の助詞、

「けん」過去推量の助動詞

「早くも大臣に告げたのであろうか。」

誇りしにはあらずや。 「し」は過去の助動詞、 「や」は

疑問の意味の係助詞

「誇つたのではないだろうか。」

足の糸は解くに由なし。

「足の糸は解く方法がない」

元旦に眠るが習ひなれば

「元旦に眠るのが習慣なので」

寂然たり。

「静かでひっそりとしている。」

帰り来たまはずば、我が命は絶えなんを。 「ず」は打ち消し

の助動詞、 「なん」は推量の助動詞

「帰っていらっしやらなかつたら、私の命は絶えてしまつていきました。」

足の糸は解くに由なし。

「足の糸は解く方法がない」

元旦に眠るが習ひなれば

「元旦に眠るのが習慣なので」

寂然たり。(せきせんたり)

「静かでひっそりとしている。」

帰り来たまはずば、我が命は絶えなを。

「”ず”は打ち消しの助動詞、”な”は完了の助動詞、”ん”は推量の助動詞」

「帰っていらっしやらなかつたら、私の命は絶えてしまう」

ひこひひ。

故郷を思ふ念と栄達を求むる心とは

「故郷を思つ気持ち(望郷の念)と出世することを求める心とは」

一刹那

「一瞬」

低徊踟躕(ていかいちちゆう)

「行ったり来たりしてためらう。」

鐘(かね)

青銅製で盆状の楽器。ひもでつるしてばちで打ち鳴らす。

合図などを使う。

駟丁

「駟者」

一瞥(いちべつ)

「ちらりと目をやうして」

襦袢(むすき)

「産着、おむつ」

黒き瞳をや持ちたらん。

「”や”は反語の係助詞、”たらん”は完了の助動詞、”ん”は推量の助動詞」

「黒い瞳を持っているであらうが、もっている。」

よもあだし名をば名乗らせたまはじ。

「”たまは”は尊敬の補助動詞、”じ”は打消推量の助動詞」

「まさか違う姓を名乗らせはなさむないでしようね。」

エリスは正式に結婚してほしいと言っている。

いかにうれしからまし。

「”まし”は反実仮想の助動詞」

「どんなにかうれしいに違いないだろうなあ。」

旅の疲れやおはさんとて、あへて訪はず

「”や”は疑問の係助詞、”ん”は推量の助動詞、”ず”は打消の助動詞」

「旅の疲れがありだろうかと思って、あえて訪ねなかつた。」

待遇ことにめでたく

「待遇が特に立派で」

ロシアに行った後の慰労会である。きっと仕事がつましかったのであろう。

問ひ慰めて後

「聞きねむらう」

東に帰る心なきか。

「東(日本)に帰る気持ちはないか。」

君が学問こそ我が測り知るところならね、語学のみにて世の用には足りなん

「”こそ”は強意の係助詞、”ね”は打消の助動詞、”な”は完了の助動詞、”ん”は推量の助動詞、”なん”で可能性に対する推量を表す。」

「君の学問は私の測り知るところではないが、語学だけでも世の中に通用することができよう。」

法律の方はよくわからないけれど、通訳として世の中に通用するとのこと。

滞留

「(旅先で)長くどまっていること」

「……さまざまの係累もやあらん」と相沢に問ひしに、

「”や”は疑問の係助詞、”ん”は推量の助動詞、”あらん”は推量の助動詞、”ん”は推量の助動詞、”あ”は打消の助動詞、”ん”は推量の助動詞」

このあたり、相沢の方から大臣に根回しが行っているのである。

その気色いなむぐくもあらず

「”ぐく”は可能の助動詞、”あらず”は打消の助動詞」

「その様子は否定するにどがきるものではないな」

あなやと思ひしが

「”し”は過去の助動詞、”あなや”は打消の助動詞」

偽りなりとも言い難きに

「”なり”は断定の助動詞、”偽り”は打消の助動詞、”なり”は断定の助動詞、”い”は打消の助動詞」

相沢と約束してしまつたから、いまはむづすだとも言いにくい。

この手にしませんがらずば

「”し”は強意の副助詞、”がらず”は打消の助動詞」

「この手にしませんがらなけむらう」

思ふ念

「思う気持ち」

心頭

「心の先、念頭」

例へんに物なかりき。

「たとえるのに(たとえる)ものがない。」

激しき寒さ骨に徹すと覚えて

「激しい寒さが骨にしみとおると感じて」

しげく降り

「激しく降り」

一寸ばかりも積もりたりき。

「"たり"は存続の助動詞、"き"は過去の助動詞」

「一寸ほども積もっていた。」

もはや十一時をや過ぎけん

「"や"は疑問の係助詞、"けん"は過去推量の助動詞」

「もう十一時を過ぎただろうか。」

立ち上がらんとするに

「"らん"は意志の助動詞」

半夜をや過ぎたりけん。

完了の助動詞、"けん"は過去推量の助動詞」

「真夜中を過ぎてしまっただろうか。」

にぎはしかりしならめど

は断定の助動詞、"め"は推量の助動詞」

「にぎやかだったであろうけれど」

「"ず"は打消の助動詞」

「まだ寝ねずとおぼしく」

身の節の痛み堪へ難ければ

「関節の痛みがたえられないので」

いかにかしたまひし。御身の姿は。

「"し"は過去の助動詞、"は"は過去の助動詞」

驚きしもうべなりけり。

「驚いたのももつともである。」

蒼然として死人に等しき我が面色

「青くなって死んだ人と同じ私の顔色」

幾たびか道にてつまづき倒れしことなれば、

「何度か道でつまづいて倒れたことなので」

答えんとすれど声いせず、

「"ん"は意志の助動詞、"ず"は打消の助動詞」

「答えようとするけれど声がない。」

膝のしきりにをののかれて立つに堪へねば、

「"ね"は打消の助動詞」

「膝がしきりにがくがくとふるえて立っているのも堪えられ

なこのひ」

椅子をつかまんとせしまでは覚えしが、

"し"は過去の助動詞、"し"は過去の助動詞」

「椅子をつかもうとしたまでは覚えているが」

人事を知る

「意識を回復する。」

エリスが懇ろにみとるほどに、

「エリスが手厚く看病するうちに」

余が彼に隠したる顛末をつばらに知りて、

「私が彼(相沢)隠していた一部始終を詳しく知って」

豊太郎はすべてを相沢に話したように思われてしまうが、

実はエリスが妊娠したことは話してなかったのである。

相沢はこのことを知らなかったのである。しかし、妊娠した

かもしれないということは、ベルリンで最初に相沢と会った

ときにはわかっていたのであるから、この点は豊太郎の手落

ちになる。

いたくやせて

「ひどくやせて」

彼を精神的に殺ししなり。

「"し"は過去の助動詞、"なり"は断定の助動詞」

「彼女を精神的に殺したのである。」

相沢のせいになっているが、豊太郎はエリスに何も話していな

いのである。

またかの夕べ大臣に聞こえ上げし一諾を知り、

「"し"は過去の助動詞」

「またあの夕べ大臣に申し上げた一諾を知って、」

日本に帰る気はないかと大臣に問われて、「承りはべり」と

答えたことを指す。さすがに豊太郎もここではエリスをドイツ

に残して、自分一人が大臣一行とともに日本に帰るといふこと

はわかっていたようである。

傍らの人をも見知らず

「"ず"は打消の助動詞」

にはかに心づきたる様にて

「急に気づいたようで」

ほとんどまつたく廃して

「ほとんど全部損なわれて」

その痴なること赤児のごとくなり。

「そのおろかなること赤ん坊のようである。」

これさへ心ありてにはあらずと見ゆ。

「"ず"は打消の助動詞」

「これさえ正気があつてのことではないと見える。」

エリスが生ける屍を抱きて

「エリスの生きている屍を抱いて」

(肉体だけは生きているが、精神的には死んでいる。)